

2023年度 学外活動応援奨学金 報告書

# イギリスにおける博物館の文化財調査

～ロンドンとオックスフォード～



中央大学 文学部 人文社会学科 西洋史学専攻 3年

21E2326013C 田倉主税

提出日 : 2024年 1月 15日 (月)

## イギリスにおける博物館の文化財調査：ロンドンとオックスフォード 目次

中央大学 文学部 人文社会学科 西洋史学専攻 3年 21E2326013C 田倉主税

- I はじめに：調査活動について
  - 5 1. 背景 — 文化財返還問題とは何か
  - 2. 前提 — 博物館の歴史
  - 3. 目的 — 現場の様子を知る
  - 4. 概要 — 期間、地域、訪問地、航空情報、宿泊情報、調査活動行程
- II 訪問施設分析
  - 10 1. ホーニマン博物館 — 動植物と人間文化が共存する博物館
    - 1-1. 概要と使命
    - 1-2. ナイジェリアへの文化財返還
    - 1-3. 現地の状況(1)：アフリカ展示のエリア
    - 1-4. 現地の状況(2)：豊富な展示ギミック
    - 15 1-5. 現地の状況(3)：子ども、楽器
    - 1-6. 総括：社会問題への視座
  - 2. ピットリバース博物館 — 所蔵品や来館者と対話し続ける博物館
    - 2-1. 概要と使命
    - 2-2. 現地の状況(1)：展示の撤去
    - 20 2-3. 現地の状況(2)：「植民地主義の足跡」
    - 2-4. 現地の状況(3)：Culture, Hierarchy, Knowledge, Place Names
    - 2-5. 総括：過去の植民地主義の歴史
  - 3. ヴィクトリア&アルバート博物館
    - 3-1. 概要と使命
    - 25 3-2. 現地の状況(1)：伝統的な博物館
    - 3-3. 現地の状況(2)：V&Aのベニン
    - 3-4. 現地の状況(3)：Restitution and repatriation(正当な所有者への返還と本国への送還)
    - 3-5. 総括：明確とは言えない姿勢
  - 4. 大英博物館
    - 30 4-1. 概要と使命
    - 4-2. 現地の状況(1)：ベニンの銘板と聖なるイバラの聖遺物箱
    - 4-3. 現地の状況(2)：オーストラリアの盾
    - 4-4. 現地の状況(3)：展示物の人気と問題の提示 — ロゼッタストーン、ミイラ、エチオピア
    - 4-5. 総括：圧倒的な規模
- 35 III おわりに：調査活動を終えて
  - 1. 考察

1-1. 文化財返還問題の展示状況 — 博物館にとっての文化財返還問題

1-2. 伝統的な「博物館」と先駆的な「博物館」 — 何も知らないまま帰宅する訪問者の存在

1-3. 博物館は要求された文化財を返還すべきか否か — ホンモノとレプリカ

2. 反省

5 3. 余談と結び

## I はじめに：調査活動について

### 1. 背景 — 文化財返還問題とは何か

5 「文化財返還問題」とは、主に植民地期・戦時期に本国の組織・人びとが当時の圧倒的な力の差を背景に植民地あるいは占領地の人びとの同意を得ることなく不当に本国に持ち帰った文化財を、「あるべき〈もの〉をあるべき〈場〉へ」という原則に基づいて、本来のあるべき状態に回復する運動です<sup>1</sup>。

10 上記の文化財返還問題の定義は、五十嵐彰『文化財返還問題を考える』から引用した。この問題は、欧米の博物館だけでなく、日本の博物館もかかわっている問題である。それゆえ、国内外においてさまざまな媒体による報道がなされており、歴史学や博物館学など関連する分野に携わる人びとの間では特に関心を集めている問題である。

15 例えば、ロンドンの大英博物館は、フランスやエジプトから、ロゼッタストーンの返還を要求されている。同館はそのほかにもエルギンマーブルなどいくつかの所蔵品が論争の的となっている。日本でも、SOMPO美術館のゴッホ〈ひまわり〉が元所有者に返還を要求されている<sup>2</sup>。あるいは、フランスのマクロン大統領のように、文化財の返還に積極的な姿勢を見せる事例もある<sup>3</sup>。

### 2. 前提 — 博物館の歴史

20

博物館の起源は、古代ギリシャの王立研究所ムーセイオンに帰する。ムーセイオンのコレクションには、絵画などに加え、キリスト教が普及すると、宗教的なコレクションも充実するようになった。大航海時代には、世界中からさまざまな物品を収集することが、権威や富の象徴となった。やがて、有力貴族や王室が所蔵するコレクションの博物館のほか、科学技術や自然史などの専門に特化する博物館も登場するようになる。20世紀後半以降には、この潮流が転換した。すなわち、先住民族の文

25

---

<sup>1</sup> 五十嵐彰『文化財返還問題を考える』岩波書店、2019年、p.4

<sup>2</sup> 「SOMPO美術館のゴッホ「ひまわり」、「ナチス迫害で強制売却」と米で返還訴訟」2023年1月5日、読売新聞、<https://www.yomiuri.co.jp/economy/20230105-OYT1T50161/>（最終アクセス：2023年10月9日(月)）

<sup>3</sup> INPS JAPAN「アフリカで略奪された美術品が、少しずつではあるが、故郷に返還されつつある」2022年5月10日、<https://inpsjapan.com/sdgs/africa-s-plundered-artifacts-are-coming-home-though-gradually/>（最終アクセス：2023年10月9日(月)）

化への注目や非ヨーロッパ諸国における博物館の躍進などによって、ヨーロッパ中心的な「博物館」からの脱却がみられるようになったのである<sup>4</sup>。

### 3. 目的 — 現場の様子を知る

5

本調査活動報告書は、2023年9月にイギリスで行なった調査活動の記録である。本調査活動の目的は、イギリスに所在する博物館の文化財返還問題にたいする姿勢を把握することである。すなわち、博物館の展示室に実際に足を運び、そこにおいて文化財返還問題がどのように捕捉・提示されているかを調査することが目的である。なお、掲載写真資料はすべて執筆者による撮影。

10

### 4. 概要 — 期間、地域、訪問地、航空情報、宿泊情報、調査活動行程

○調査活動期間：

◦ 2023年9月10日(日)～18日(月)

15 ※イギリス滞在期間は2023年9月11日(月)～17日(日)

○対象地域：

◦ イギリス(ロンドン、オックスフォード)

20 ○主要訪問施設：

◦ 大英博物館(The British Museum、ロンドン)

◦ ホーニマン博物館(Horniman Museum、ロンドン)

◦ ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館(Victoria And Albert Museum、ロンドン)

◦ ピットリバーズ博物館(Pitt Rivers Museum、オックスフォード)

25

○利用航空会社：

◦ LOTポーランド航空

○航空機航路：

30 ◦ 往路=成田国際空港→ワルシャワ・フレデリック・ショパン国際空港→ロンドン・ヒースロー空港

---

<sup>4</sup> 文化庁「博物館について」『文化庁 博物館総合サイト』、<https://museum.bunka.go.jp/museum/> (最終アクセス：2023年10月9日(月))

- 復路=ロンドン・ヒースロー空港→ワルシャワ・フレデリック・ショパン国際空港→成田国際空港
- ※ いずれもポーランドにて乗継

○宿泊場所：

- 5
- ホテル キャベンディッシュ (Hotel Cavendish) (大英博物館から徒歩10分程度に所在)
  - ※住所：75 Gower St, London WC1E 6HJ イギリス
  - ※公式 WEB サイト：<https://crowngroupofhotels.com/hotel-cavendish-london-gower-street> (最終アクセス:2023年9月30日(土))

10 ○活動行程(すべて現地時間)

- 9/10(日)(日本国出国日) 22:35成田国際空港発→ワルシャワ・フレデリック・ショパン空港乗継
- 9/11(月)(イギリス1日目) 9:25ロンドン・ヒースロー空港着、14:30-17:00大英博物館
- 9/12(火)(イギリス2日目) 10:30-17:30ホーニマン博物館
- 9/13(水)(イギリス3日目) 12:00-16:00ピッドリバース博物館、16:15-17:00アシュモレアン博物館

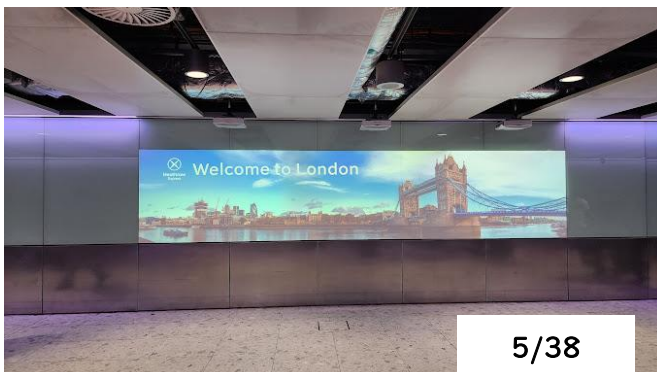
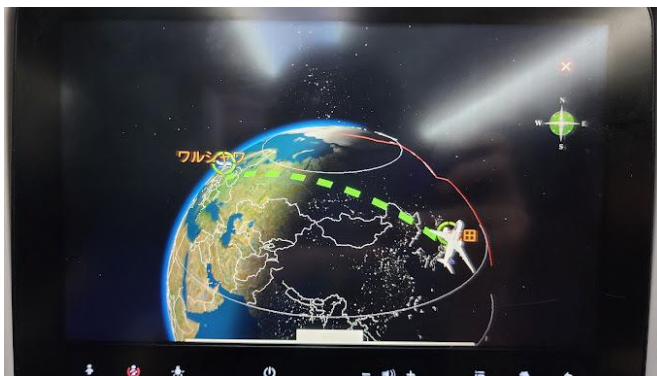
15

- 9/14(木)(イギリス4日目) 10:00-17:00ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館
- 9/15(金)(イギリス5日目) 9:00-20:00大英博物館、8:50-Out-of-hours tour：an introduction to ancient Egypt、14:00-Around the world in 90 minutes tour
- 9/16(土)(イギリス6日目) 9:00-17:00大英博物館、8:50-Out-of-hours tour：an introduction to the British Museum

20

- 9/17(日)(イギリス7日目) 13:30ロンドン・ヒースロー空港着、18:10ロンドン・ヒースロー空港発→ワルシャワ・フレデリック・ショパン空港乗継
- 9/18(月)(日本国帰国日) 18:30成田国際空港着

25



## II 訪問施設分析

### 1. ホーニマン博物館 — 動植物と人間文化が共存する博物館

#### 5 1-1. 概要と使命

ホーニマン博物館は、1901年に開館した、ロンドン南東部にある博物館である。館名は収集家の名前からとられた。コレクションは、人類学・自然史・楽器にかかわる。人類学については、10万点以上のコレクションがあり、アジアやアフリカなど世界の多様な地域にかんするそれぞれの展示場がある。自然史については、25万点以上のコレクションがあり、標本や剥製、化石を所蔵している。楽器については、9千5百点を超える所蔵があり、英国一の展示数を誇る楽器ギャラリーが創設されている。また、動植物の生育も行なわれており、敷地内にはバタフライ・ハウスや水族館が設置されているほか、羊や鳥類も飼育されている。庭園では、野生と思われるリスやハトを見かけることもできた。庭園にはほかに、創作楽器を楽しめる場であるサウンド・ガーデンなどがある。

15 ホーニマン博物館の使命は、「ロンドンで唯一、自然と文化を並べながら探検できる場所として、人びとを、世界の文化そして自然環境と結びつけ、前向きな未来の形成を促進すること」である。



⇒ 自然史展示



⇒ 人類学展示



⇒ 楽器展示



## 1-2. ナイジェリアへの文化財返還

同館は、72点の物品について、その所有権をナイジェリアへ返還した博物館である。これは英国で初となる大規模な措置である。ナイジェリアの国家博物館記念物委員会（NCMM）は、2022年1月、ホーニマン博物館に、コレクションの返還を要求した。その後の協議の結果、コレクションの返還は道徳的かつ適切と判断された。ホーニマン博物館の館長ニック・メリマン氏は、調査の結果、返還することになった物品は略奪されたことに疑いの余地がなかったとしている。同氏はまた、「博物館が植民地時代の歴史を認識することに関して転換点を迎えている」と語った<sup>5</sup>。

なお、アフリカに関連する話としては、ホーニマン博物館は、アフリカの芸術と文化に特化した常設展示を、1999年に英国で初めて創設した博物館でもある。次の項目では、その展示に言及する。

### 1-3. 現地の状況(1)：アフリカ展示のエリア

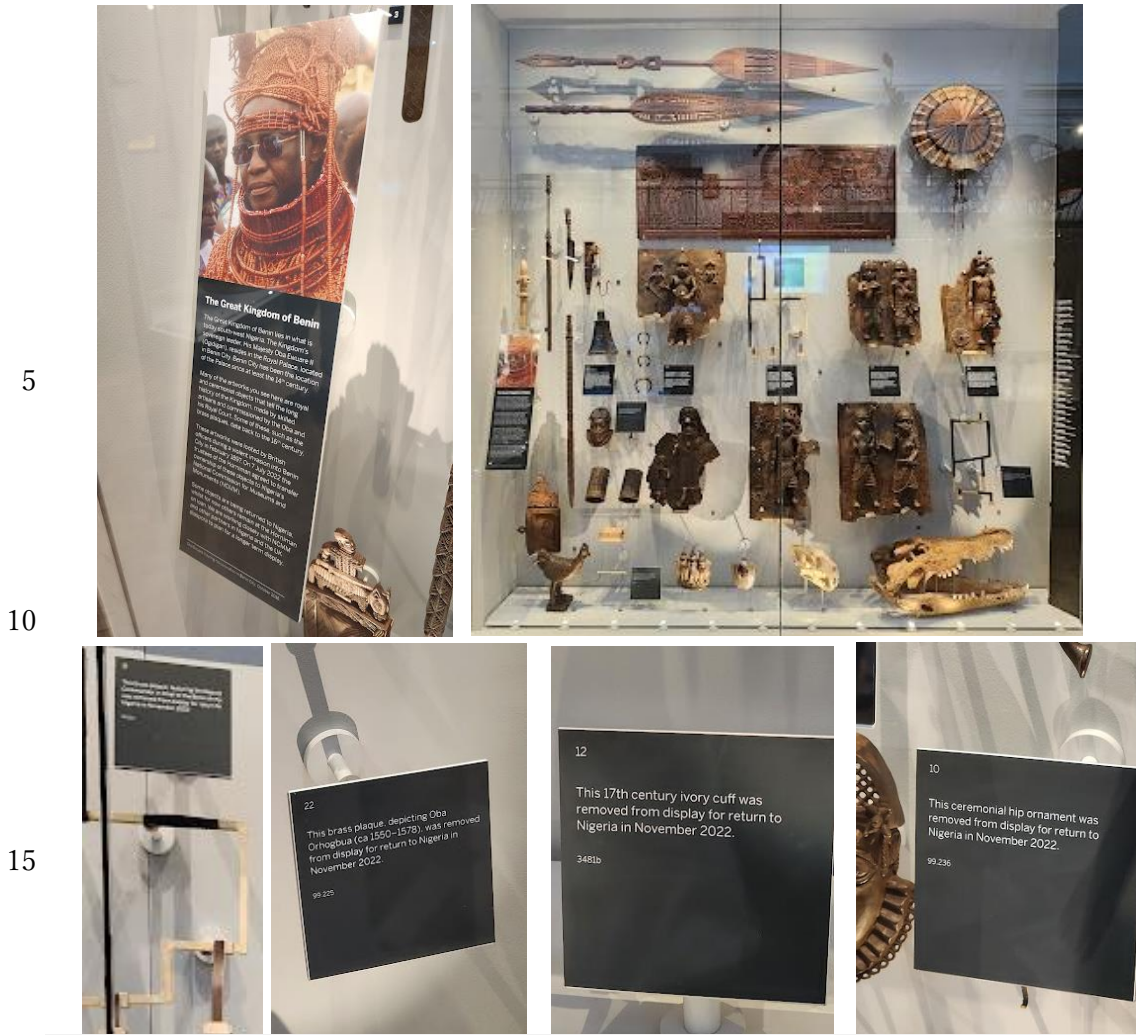
訪問時点では、4つのベニンの工芸品について、「2022年11月にナイジェリアへ返還するために展示から取り除かれた」と表記されていた。その4つの物品は、「ベニン軍隊の副長官を表した真鍮の銘板」（99.224）、「Orihogbua王を描写した真鍮の銘板」（99.225）、「儀式用の腰飾り」（99.236）、「17世紀の象牙の腕輪」（3481b）である。なお、これらの物品の詳細な情報については、返還後の現在であっても引き続き、ホーニマン博物館の公式WEBサイト上にあるコレクション検索ページで確認することができる。

ホーニマン博物館では、返還の問題そのものについて言及したパネルが、比較的目立つようなサイズで掲示されていた。それは少なくとも、展示ケース内でいちばんはじめに目に入る可能性が高い大きさであった。前提として、今回、私自身は、ホーニマン博物館の文化財返還問題にかんするインターネットの記事を事前に確認して、来訪した。しかし、同問題を知るためにホーニマン博物館を訪問する人は、おそらく相対的に少数であると考えられる。そのため、ホーニマン博物館の手法であれば、そうした予備知識のない来館者であっても、比較的発見の容易なパネルによって、文化財返還問題について認識できるような工夫がされていると言える。

---

<sup>5</sup> Benin Bronzes: Nigeria hails 'great day' as London museum signs over looted objects (<https://www.bbc.com/news/entertainment-arts-63783561>), 28 November 2022, accessed: 2023.10.16



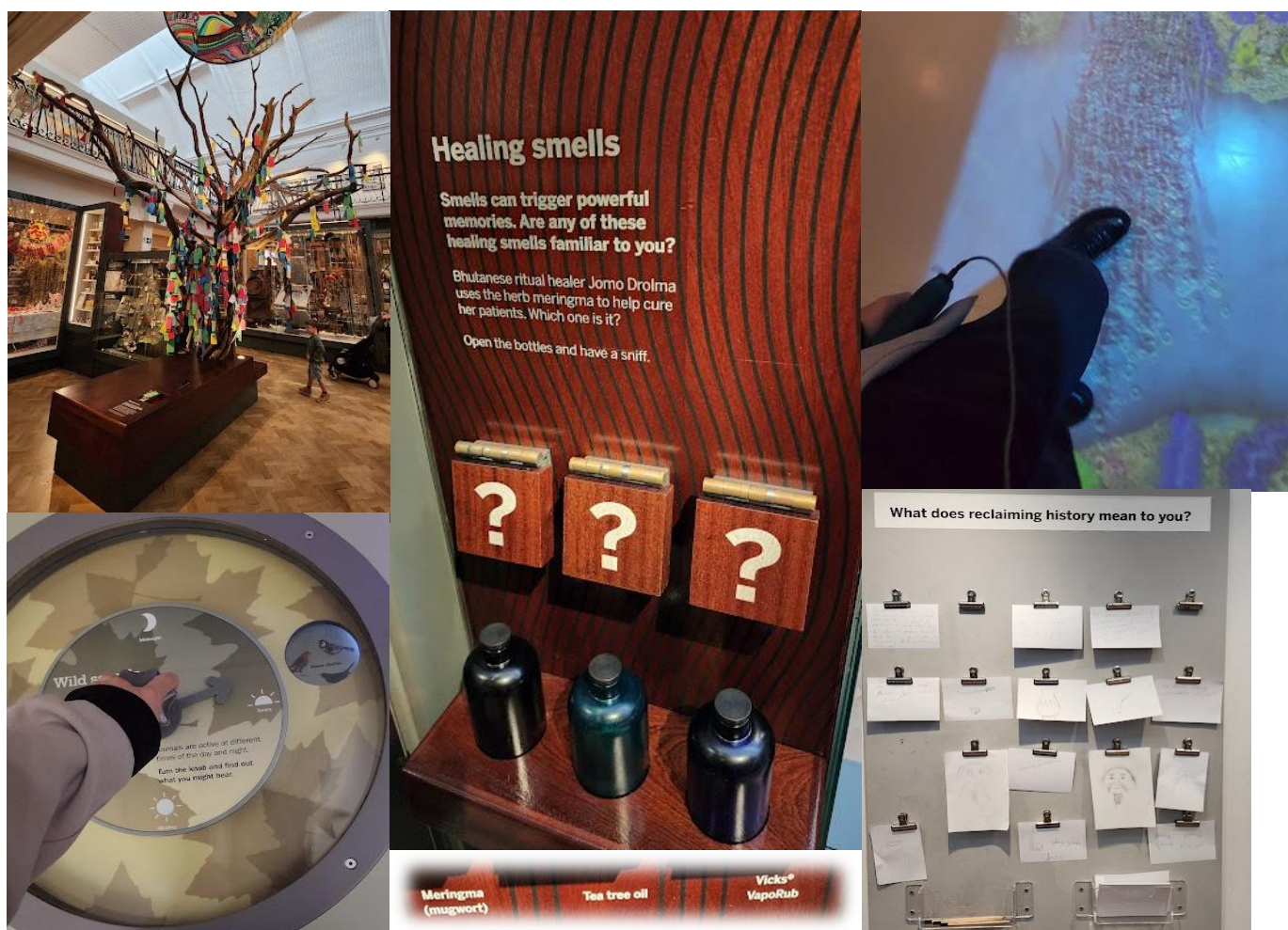


上段：アフリカの展示エリア内において文化財返還問題を取り上げている展示ケース  
 下段：「〇〇は撤去され、ナイジェリアに返還された」の文言

#### 1-4. 現地の状況(2)：豊富な展示ギミック

- 25 ロンドンに訪してから、時間をかけて施設の隅々まで観覧した博物館は、ホーニマン博物館が最初である。初めて外国の博物館に訪問した私にとって、ホーニマン博物館が有する多様な展示能力は印象深かった。特に、視覚以外の五感に訴えかける展示が記憶に強く残存している。具体的には、触覚や嗅覚にかんする展示である。例えば、触覚については、北アメリカ大陸の極寒の気温に耐久するための衣服の素材となる、カリブーやアザラシの毛皮に触れることができる展示が設置されていた。また、嗅覚については、ブータンの儀式で患者の治療に使われるハーブの香りを体験できる展示が設置されていた。前提として、嗅覚資料は、史料としては残りづらいものである。日本における嗅覚資料の展示事例としては、国立科学博物館の特別展が代表的と言えるが、少なくとも都内のほかの博物館において、歴史分野としての嗅覚資料の展示は、決して一般的では無い。そのような状況を踏まえても、ホーニマン博物館の事例は、印象に残るようなものであった。
- 35 そのほか、円形パネルを回して鳥のイラストを指定するとその鳴き声が流れる展示、スタッフが常駐しながら参加もしているハンズ・オン展示、自分の足元に魚が集まってくるデジタルエフェクト付き

の床、ぐるぐる回転できる大きな地球儀、そのほか、次の項目にも関係するが、来館者参加型の展示や、各楽器の音を再生できる設備、などといった形で、多様な展示方式がとられていた。



- 左列上： Cloutie tree 来観者は願望や感謝を結び付けることができる
- 左列下： 円形パネルを回して鳥のイラストを指定するとその鳴き声が流れる
- 中央列： ブータンの儀式で患者の治療に使われるハーブの香りを体験できる ※下部は回答
- 右列上： 自分の足元に魚が集まってくるデジタルエフェクト付きの床
- 右列下： What does reclaiming history mean to you? という質問に来館者が回答できる

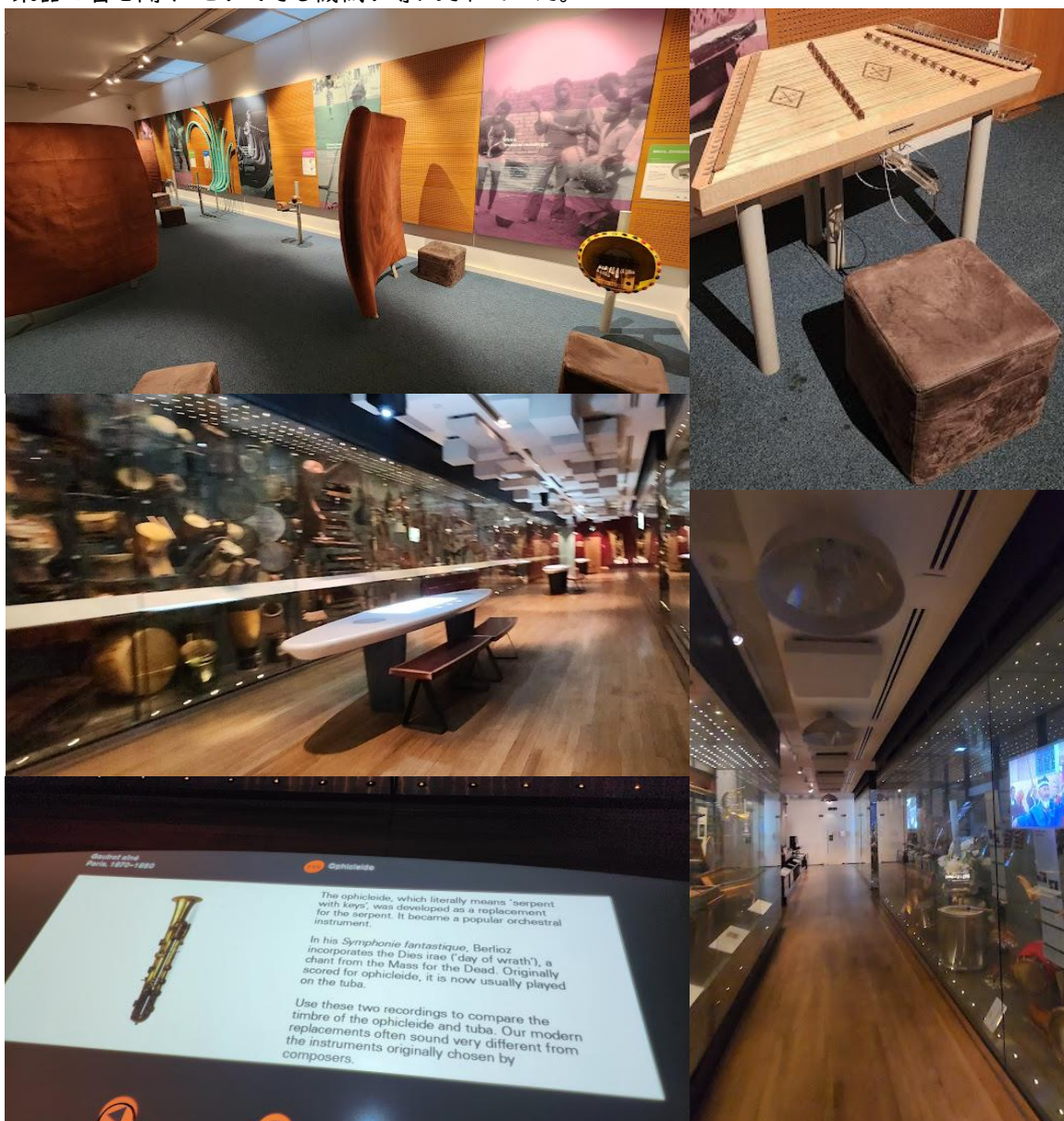
30 1-5. 現地の状況(3)：子ども、楽器

訪問時には、一般の来館者とは別に、学校のクラス単位で来館していると思われる子どもの集団に遭遇した。入館のタイミングが偶然的にいっしょであった広い展示室を、先生の指示に応じて、ま  
 35 ともって移動・観覧しているようだった。具体的には、自然史の展示室と人類学の展示室においては、子どもたちをみかけた。自然史の展示室では、おそらく課題として提示されたのだと思われるが、子どもたちが各々で好みの動物を選び、鉛筆と紙を使用してスケッチ作業をしていた。人類学の展示

室では、アフリカの無名のケニア人考古学者の成果を称える企画展が開催されていた。ここには、質問文「What does reclaiming history mean to you?」にたいして、自分の意見を記述した紙をクリップ留めできる場が設置されていた（前頁に写真掲載）。それに実際に参加している子どもたちも多かった。ただ、子どもたちは、楽器ギャラリーでは遭遇しなかった。おそらく、意図すれば直接触ることができる資料が展示されているために、学校が入室を計画に含めていなかったのではないかと考えられる。

楽器ギャラリーは、英国内で最大の展示数を誇る。ハンズ・オン展示のエリアも用意されている。多様な展示形態としては、その下にいる人にもみ映像の音声聞こえる傘型の天井スピーカーや楽器の音を聞くことができる機械が導入されていた。

10



15

20

25

30

左列上・右列上：ハンズ・オン展示 左列中・左列下：楽器の音を聞くことができる装置  
右列下：その下にいる人にもみ映像の音声聞こえる傘型の天井スピーカー

## 1-6. 総括：社会問題への視座

ホーニマン博物館の特徴は、社会問題への視座を来館者に明示していることである。館内には、来館者が考えさせられるような展示やパネルが数多く存在した。自然史の展示室で最も入り口付近に展示されているアオウミガメの剥製は、プラスチックごみと同じケース内に展示され、海洋プラスチックの問題に言及する展示内容となっている。単に多様な動物を見ることを目的として自然史の展示室を訪問する来館者にとっては、第一の展示が海洋プラスチックの問題にかんする展示であるということは、衝撃ではないだろうか。そのほかにも例えば、楽器の展示室では、大気汚染の話題について、言及された展示があった。大気汚染が死亡要因とされたEllaの存在は、人びとが綺麗な空気を吸うことを権利として保障するElla's Lawの制定に貢献した。展示ケースには、彼女が演奏していたコルネットと、その先祖にあたる法螺貝が展示されていた。

こうした社会問題の提示のターゲットとしては、大人だけでなく、子どもも想定しているためか、それぞれのパネル等に掲載されている問いかけは素朴でわかりやすいものであった。ホーニマン博物館のこの特徴は、ひとえに、同館が持つ方針の表れであると考ええる。同館の方針は、1-1.に記述した使命のとおり、人びとを自然と文化に接触させ、善い未来形成を促すことである。他方で、1-2.に記述したとおり、ホーニマン博物館の館長ニック・メリマン氏は、「博物館が植民地時代の歴史を認識することにかんして転換点を迎えている」と語っている。ホーニマン博物館は、その使命と、館長の言葉どおり、博物館として歴史の認識をはじめとする諸社会問題への視座を持ちながら、それを来館者に共有し、来館者に考えてもらうことに尽力しているのである。

受付カウンターで購入したガイドブックの末尾には、「A Place for Everyone」と題した項目がある。そのなかで、「ホーニマン博物館は、境遇や状況や能力にかかわらず、すべての人びとを歓迎する、インスピレーションや学びの場である」と記述されている。ホーニマン博物館のこうした精神は、イギリスにおける大規模な文化財返還を実現するに至った要因のひとつではないだろうか。



左列：コルネットと法螺貝  
中列：アオウミガメの剥製と海洋プラスチックごみ  
右列：来館者



## 2. ピットリバーズ博物館 — 所蔵品や来館者と対話し続ける博物館

### 2-1. 概要と使命

- 5      ピットリバーズ博物館は、オックスフォード大学に附属する博物館である。オックスフォード大学自然史博物館のなかに入口がある。館名は収集家の名前からとられた。コレクションは、人類学と世界の考古学にかかわる。所蔵品は、60万点以上に上る。展示の特徴は、一般的な博物館と違い、地域別や時代別ではなく、物品の種類別に、展示物を並べていることである。これは、収集者のピットリバーズ自身が、社会進化論に影響されていたことが関係している。社会進化論は、社会が未開・野蛮・文明の3つの状態を経て進化していくとする考え方である。収集者のピットリバーズは、異なる文化の類似する物品を比較したり漸進的な向上を確認したりすることで、社会進化論を実証しようとしていたのである。そのため、物品に付属するラベルには、軽蔑的で人種差別的な言葉が使用されていることもある。また、展示ケース内の解釈のなかには、帝国による破壊的な結果が非常に婉曲的に表現されているものもある。
- 10
- 15      ピットリバーズ博物館が目指しているのは、同館が、「絡まった過去と現在についての対話が行なわれる場所、多様性が尊重され、人間であることの意味を再考するために物品が用いられる場所、暴力や対立の無い新たな未来を想像できる場所」となること、である<sup>6</sup>。



天井まで展示物で満たされている展示室 →

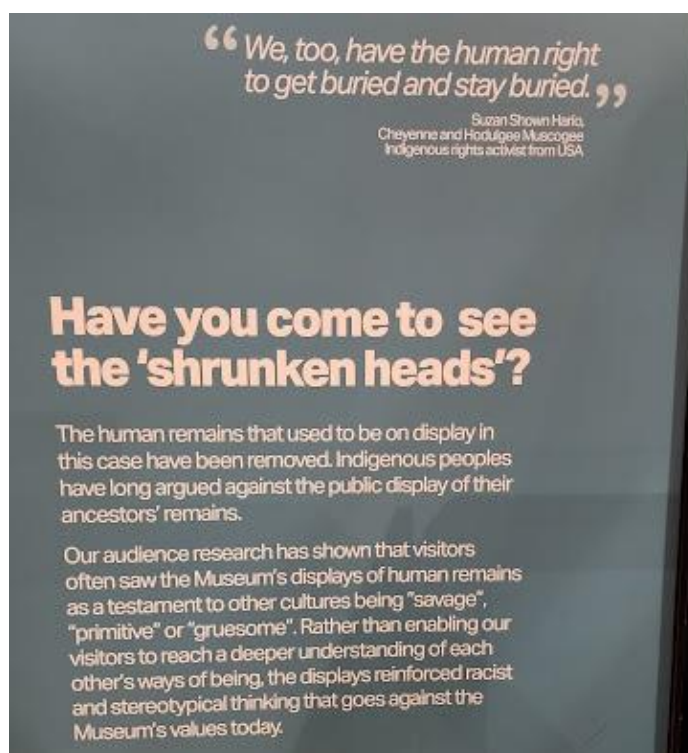


<sup>6</sup> Pitt Rivers Museum: A SHORT GUIDE、2019 年

## 2-2. 現地の状況(1) : 展示の撤去

ピットリバーズ博物館は、Human remainsを所蔵している。Human remainsとは、人間の骨、皮膚、歯、髪などのことである。地域としては、イギリスをはじめとする欧米諸国からのものはもちろん、  
5 アフリカ、オセアニア、日本を含むアジアからのものもある。ただし、ヨーロッパのHuman remainsは考古学的な骨の破片である一方で、それ以外の地域から収集したHuman remainsは、問題のある社会進化論を反映している。ピットリバーズ博物館の1階には、Human remainsが収用された展示ケースがあったようだが、訪問時には、その中身が撤去されている状態であった。これは、先祖の遺骨を公に展示することに反対してきた来館者の意見を反映している。撤去する展示物について、  
10 その経緯を明確にパネルで示していることは、ピットリバーズ博物館の特徴と言えよう。なお、購入した図録には展示撤去前の写真が掲載されていたものの、ここへの転載は控える。

公式WEBサイトによると、ピットリバーズ博物館は、2020年7月に、すべてのHuman remainsを展示室から撤去することを決定している。また、現在までに123点が撤去されたものの、ほかの展示物にもHuman remainsが含まれていることが判明しつつあるため、さらなる撤去の可能性も存在するとのことである<sup>7</sup>。  
15



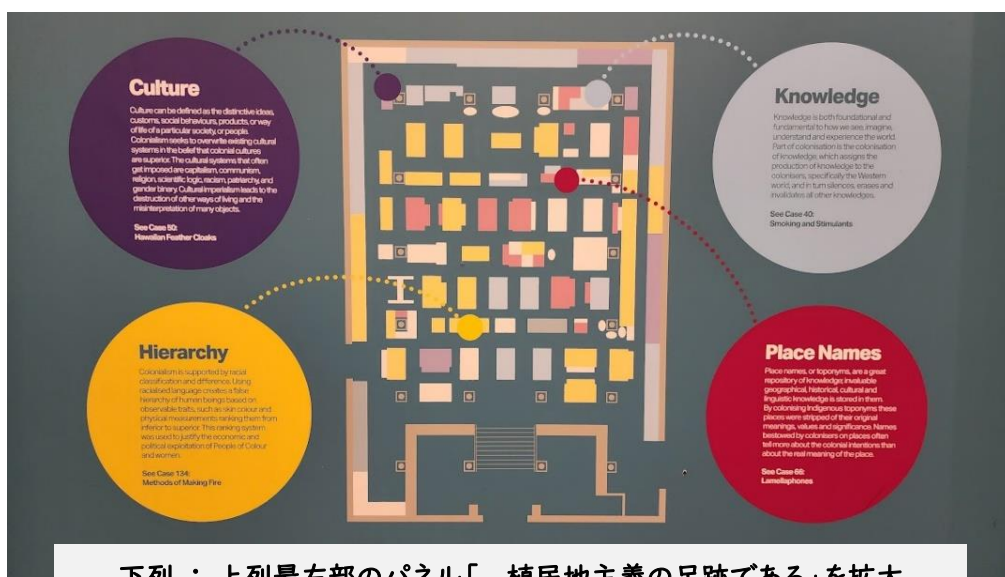
<sup>7</sup> Pitt Rivers Museum, *Human remains in the Pitt Rivers Museum*

(<https://www.prm.ox.ac.uk/human-remains-pitt-rivers-museum>), accessed: 2023.10.18

## 2-3. 現地の状況(2) : 「植民地主義の足跡」

「ピットリバーズ博物館は...」「...植民地主義の足跡である」と書かれたパネルに、次のようなことが書かれている。多くの非ヨーロッパ諸国が植民地支配から解放されたとしても、過去は依然として存在している。すなわち、植民地主義は、人種・階級・文化・ジェンダー・セクシュアリティにかんする私たちの無意識的な考え方を生成している。それは、ヒエラルキーの確立 (establishing Hierarchies)、知識の操作 (controlling Knowledge)、白人の文化や地名の押し付け (imposing White Culture and Place Names) という、3つのプロセスを経て行なわれているのである。

- 5
- 10 展示室1階にある展示室の平面図には、上記の3つの各プロセスが反映されている物品の展示場場所が色付けされている。また、3つのプロセスにかんするより詳細な解説が付されたパネルが展示室内の4か所に設置されている。次の項目では、これについて記述する。

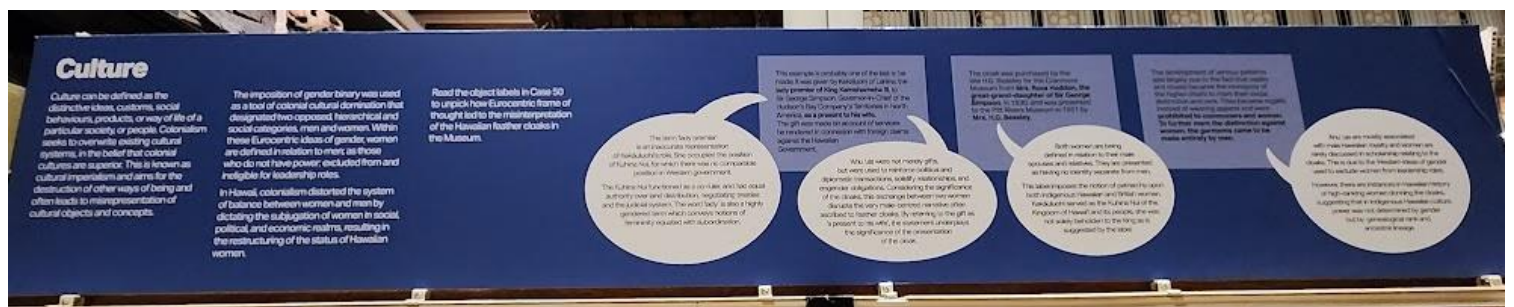


下列：上列最左部のパネル「...植民地主義の足跡である」を拡大

## 2-4. 現地の状況(3) : Culture, Hierarchy, Knowledge, Place Names

上述した「4か所のパネル」のそれぞれの題目は、Culture、Hierarchy、Knowledge、Place Namesであった。以下で順番にみていく。

- 5 Cultureのパネルでは、既存の現地文化を上書きしていく文化帝国主義について言及される。例えば、ハワイの伝統的なマント'Ahu'ulaは、「男性の高い地位を示すものであり、庶民や女性の着用は禁止された」と解説されている。しかし、ハワイの歴史には、地位の高い女性が'Ahu'ulaを着用していた事例がある。これは、ハワイの文化における権力が、西洋的なジェンダーではなく、血筋によって決定されていたことを意味する。すなわち、展示解説において、現地の文化が、西洋風に改変されてしまっていると言える。



上列 : Cultureのパネル  
 下列 : ハワイの伝統的なマント'Ahu'ula

20

25

30

Hierarchyのパネルでは、植民地主義が差別的な言葉を使用して人間をランク付けすることについて言及される。具体的には、「ヨーロッパ」や「アフリカ」や「オセアニア」といった各地域の解説文に使われている「階級を表す言葉」を分析した結果が、円グラフで示される。例えば、ヨーロッパには、「近代的」という言葉が多く使用され、アフリカ・オセアニア・アジア・南アメリカ・オーストラリアには「部族的」という言葉が多く使用される。これは、キャプションの差別性を証明していると言える。

35



# Hierarchy

Colonialism is supported by racial classification and difference. Using racialized language creates a false hierarchy of human beings based on observable traits, such as skin colour and physical measurements ranking them from inferior to superior. This ranking system was used to justify the economic and political exploitation of People of Colour and women.

Racialized hierarchies linked to intelligence, labour and gender have been a core part of the Pitt Rivers Museum from its founding. General Pitt Rivers himself believed in social evolutionism, which centred universal evolutionary stages to classify different societies as in a state of savagery, barbarism, or civilisation. European societies positioned themselves at the highest rank of civilization.

Historically false hierarchies were based on assumed characteristics such as intelligence and behaviour were used to label societies as civilized, uncivilized, modern, savage, superior, inferior, etc. The diagram below shows the use of such hierarchical language in the Museum's labelling and frequency of use by continent.



Based on the diagram which cultural groups has the museum positioned at the top and bottom of the hierarchical rankings?

How does this language reinforce racial stereotypes?



The grammar of hierarchy has been used in this case to create a false narrative of cultural and technological 'progress' of fire-making.

In an effort to showcase comparative technologies, the display reduces fire-making to a purely technological process. However, terminology here is creating a false narrative. While considering the deep social and cultural importance of fire-making important for cultures recognized as 'civilised' such as European countries, Japan, South Korea, and Ancient Egypt, 'simple' hand-made fire-drills are referred to as 'used' 'vernacular'.

However, when talking about drills used by the peoples of Africa, South-East Asia, and Australia hand fire-drills are referenced in terms of daily living and practicality.

Therefore, 'simplicity' of fire-making as a purely technological and survival process is assigned to countries that are poorly situated on the constructed hierarchy, while countries deemed more 'civilised' or closer to European norms only use it as 'simple' technology as a part of their social and cultural landscapes while in fact the making of fire has deep social and cultural importance in all cultures and often certain techniques are purposefully used as a very conscious choice.

The diagram below shows the relative frequency of use of hierarchical language in the Museum's labelling by continent.



Challenge this stereotype: Listen to Maasai representative Amos Karino Lauka discuss the cultural importance of wooden fire-drills and fire-making as part of the inauguration ceremony of a new political leadership cohort.



Hierarchyのパネル

Knowledgeのパネルでは、注意が必要なキャプションについて言及される。例えば、展示されているアヘンのキャプションは、「アヘンは違法薬物である」という文章から始まるが、これは、アヘンという言葉に、否定的な意味合いのみを与えることになっている。かつ、その活用範囲を限りなく狭小化している。また、アヘンの来歴について、「トルコ原産で、中国には1,300年後に伝来」と記述することは、アヘンをあたかも中国の文化・歴史のみに属するものであるとみなしかねない。これは、薬物としての歴史的・今日的でグローバルな影響を無視することになっている。すなわち、キャプションは、ごくわずかな情報を偏向的に伝達している可能性があるのである。



Knowledgeのパネル

Place Namesのパネルでは、「名前の付与」の権力性が言及される。具体的には、ラメラフォンが取り上げられる。ラメラフォンとは、ヨーロッパ中心的理解によって一般化された楽器の学術的な呼び名である。例えば、アフリカをはじめとするほかの地域では、ムビラなど、まったく別の名称で呼ばれることがある。

5  
10  
15

Place namesのパネル



パネル中央右を拡大↓

このように、一見すると植民地主義とは無縁で、娯楽や祭祀のみのための物品と思われがちである楽器までも、植民地主義の説明に活用していることは、ピットリバース博物館の特徴である。なお、前述したホーニマン博物館は、英国一の楽器展示数を誇るものの、楽器と植民地主義の結びつきを明らかにするような展示は行なわれていなかった。

20  
25

2-5. 総括：過去の植民地主義の歴史



ピットリバース博物館の展示は、一見すると、収集された物品をひたすら並べ、来館者を驚かせることに徹底しているように思われてしまうかもしれない。しかし、実際には、所蔵品の来歴や来館者の声を誠実に検討し、展示パネルに反映している。これは例えば、Human remainsにたいする倫理的な態度に見られる。そして、いくつかの展示パネルは、来館者が、博物館の直面している問題を自分ごとのように考えることができるようになってきている。すなわち、ピットリバース博物館は、来館者にたいして、同館が植民地主義の時代に創設されたことを強調したうえで、社会進化論に基づいたラベリングの存在に言及し、同館の展示が決して中立的な内容ではないことに注意する必要があることを明示しているのである。また、Eメール等での積極的な意見提供を歓迎していることも特徴的である。来館者が思考し、各々が自由な形で博物館に参加していくことができるという点においては、ホーニマン博物館と通じるところがあると言えるだろう。

30  
35

### 3. ヴィクトリア&アルバート博物館

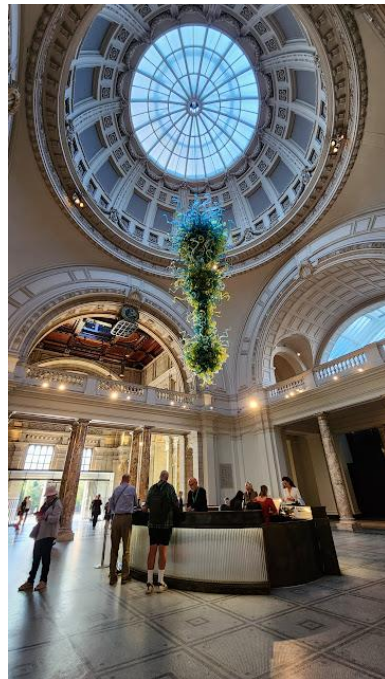
#### 3-1. 概要と使命

- 5 ヴィクトリア&アルバート博物館（以下、V&A）は、アート、デザイン、パフォーマンスを取り扱う、世界でも有数の博物館である。より具体的には、建築、ファッション、写真、演劇、彫刻、コンテンポラリー（現代的）デザイン、陶磁器、アジアの芸術作品やデザイン、家具、織物宝石、金属作品など、280万点以上の物品を収蔵している。その対象とする範囲は、ヨーロッパ、北アメリカ、アジア、北アフリカなどであり、その対象とする時代は、古代から現代までである。
- 10 V&Aの使命は、コレクションを通じて、世界にたいする人びとの理解・知識・楽しさを高めることで人びとの生活を豊かにすることである。

15



20



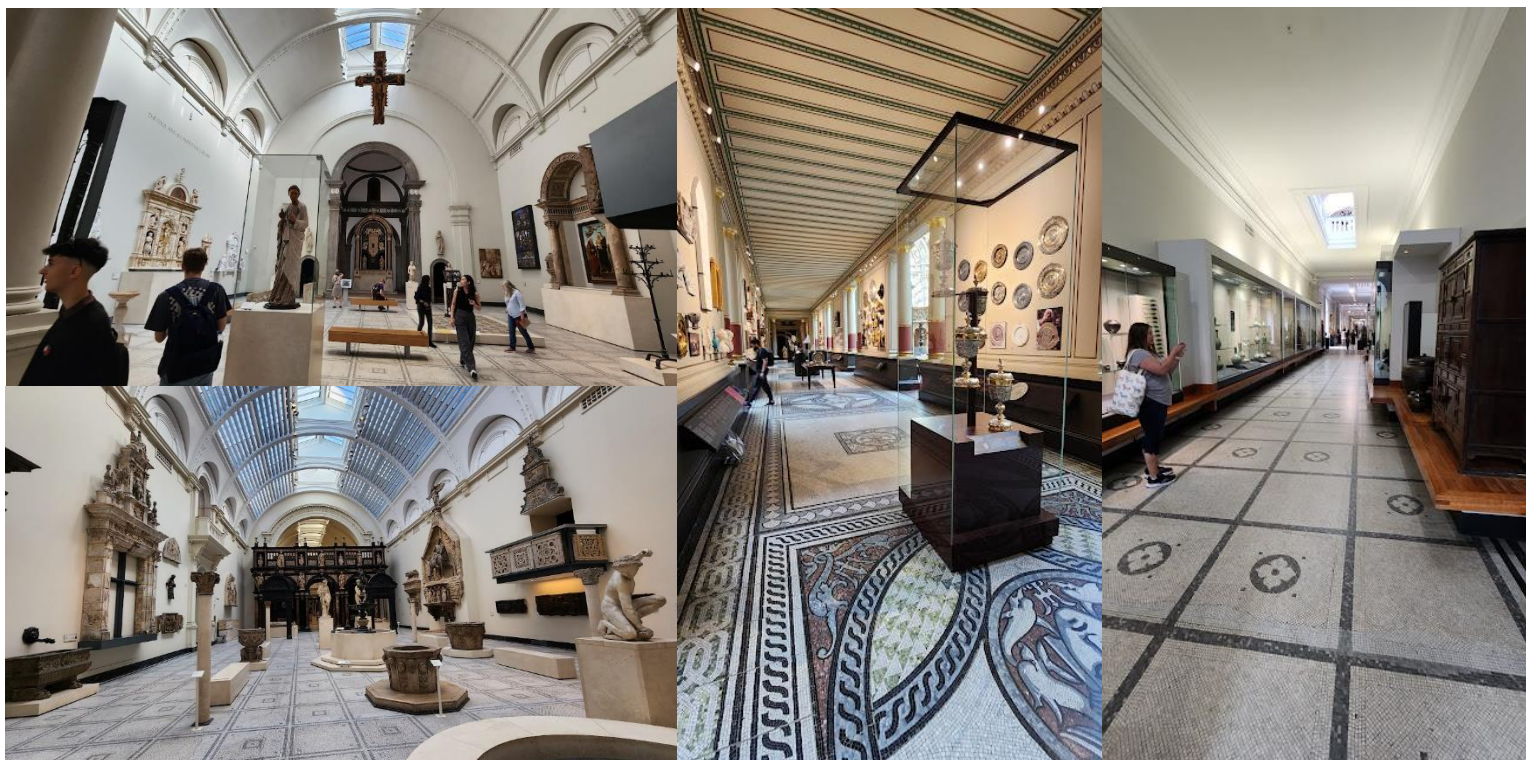
25

#### 3-2. 現地の状況(1)：伝統的な博物館

- 30 華麗な装飾がなされた広大な館内には、膨大な数の彫刻や絵画や家具が展示されている。その展示方法はまさしく、ヨーロッパを起源とする20世紀後半以前における伝統的な「博物館」の手法であるように思われた。すなわち、権威や富の象徴としてのコレクションの提示である。他方で、ここ

まで見てきたホーニマン博物館やピットリバース博物館は、20世紀後半以降の新たな潮流に沿った博物館であると言える。具体的な違いとしては、ホーニマン博物館やピットリバース博物館には、社会問題に関連する疑問形の文章や展示の性質・留意点などについて、大きな文字で明確に記載されたパネルが見られた。たいてい、V&Aでは、それらを見つけることはできなかった<sup>8</sup>。

- 5 本調査とは直接の関連は無いが、来館者のうち、折り畳み式のイスを持ち歩いている方がいたことが印象に残っている。このイスはおそらく貸し出されているもので、これに座って展示物をスケッチする来館者やツアーの解説を座って聞く来館者を見かけることができた。スケッチについては、ピットリバース博物館においても同様であったものの、同館の場合、来館者はところどころに設置されている既存の座席を利用していため、運搬可能なイスの貸出はおそらく実施されていないと思われる。



### 3-3. 現地の状況(2) : V&Aのベニン

- 30 現地では、ハイライトツアーやファッションツアーなど、ボランティアによるいくつかの無料ツアーに参加したが、いずれにおいても、本調査活動にかかわる解説を得ることはできなかった。しかし、ツアーに参加しながら館内を歩き回るなかで、ベニン王国の銘板を発見した。これは、1.に記述した、ホ

<sup>8</sup> 博物館の歴史については、Iの2.参照。

ーニマン博物館がナイジェリアに返還した工芸品と同様のルーツを持つ工芸品で論争的となっている展示物のひとつとみなすことができるだろう。キャプションを見ても、大英博物館から貸与されているものであった。本文では、銘板がベニン王宮の装飾品であったことや、描かれている人物について記述されている。



ツアーの一例

- 5 この本文内においては、略奪性について言及は無い。他方で、そのすぐ右部分にある、本文の文字よりもさらに小さな文字で記載された銘板の基本情報のなかに、略奪性が言及されている。内容としては、「ベニン王宮から略奪され、大英博物館に移送」という旨である。この箇所が唯一、文化財の略奪性について言及した箇所であるものの、これによってV&Aの文化財返還問題にたいする姿勢を判断することは性急である。しかしながら、ベニン王国の銘板が、論争となっていないほかの多くの展示物とほとんど同様に展示されていることは事実である。これを踏まえると、V&Aが、現代的な社会問題にたいする来館者への情報提供よりも、伝統的な「博物館」の姿を大切にしているとみなすことは、概ね妥当であるように思われる。



3 TWO BRASS PLAQUES FROM BENIN  
1500-1700

These plaques once decorated the royal palace in the great city of Benin and show the importance of trade between West Africans and Europeans in the 16th and 17th centuries. The upper plaque depicts the face of a Portuguese man and includes four manillas as symbols of exchange. The lower plaque depicts a Benin court official, manilla in hand. Trade with Portuguese and other European merchants was a royal prerogative.

Kingdom of Benin  
(Benin City, Nigeria)  
Brass

Looted from the royal palace in Benin by British troops in 1897 and transferred to the British Museum by the Foreign Office

Lent by The British Museum (Afi898,0115,78 & Afi898,0115,8)

3つの距離から撮影したベニンの銘板とそのキャプション

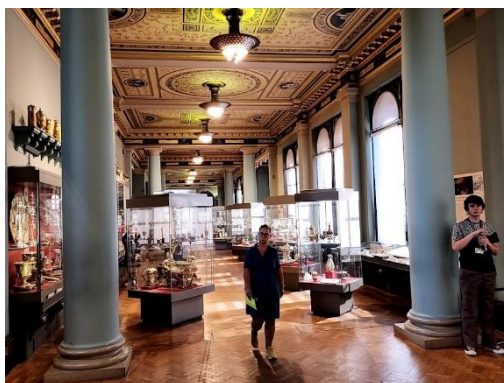
### 3-4. 現地の状況(3) : Restitution and repatriation(正当な所有者への返還と本国への送還)

V&Aは、公式WEBサイトにて、「正当な所有者への返還と本国への送還」と題したページを掲載している<sup>9</sup>。同ページでは、博物館にとって文化財返還問題が問題となっていることや、イスタンブールやエチオピアの博物館と提携していることが記載されている。また、1868年にイギリス軍が遠征を経て持ち帰ったエチオピアの物品に焦点を当てた2019年の特別展示の情報も記載されている。これらのことから、V&Aは文化財返還の問題にたいして問題意識を認識していると考えられるものの、前述したベニンの作品のように、現場の展示室は、その意識をあまり反映していないようである。

V&Aは、かつてイギリスが19世紀末に略奪した文化財群を所蔵している。エチオピア政府はV&Aにたいし、2007年より、これらの物品について永久的な返還を要求している。2018年に再度「永久返還」を要求されたさいに、V&A館長は、「エチオピアへの長期的な貸し出しは素晴らしいことである」とコメントした。これにたいしてエチオピア政府は、「我が国の要求は返還であり、貸出など望んでいない」と応酬した。すなわち、エチオピア政府は「永久返還」を求めているものの、V&Aはその「永久返還」を、「長期貸出」と捉え直していると言えよう。

### 3-5. 総括 : 明確とは言えない姿勢

上述のとおり、公式WEBサイト上で専用ページを用意するという形で、V&Aが文化財返還問題にたいして少なからず問題意識を持っていることは確実である。他方で、その姿勢は、現場の展示室にはそれほど反映されていない。その理由はおそらく、伝統的な「博物館」としての姿を大切にしているためであると考えられる。しかしながら、文化財返還問題にたいするV&Aの姿勢は、検討の余地が残されていると言える。



<sup>9</sup> V&A, *Restitution and repatriation* (<https://www.vam.ac.uk/info/restitution-and-repatriation>), accessed: 2023.10.18

## 4. 大英博物館

### 4-1. 概要と使命

- 5 大英博物館の起源は、医師で収集家であったサー・ハンス・スローンによる7万点以上のコレクションの遺贈である。それには、骨董品、硬貨、メダル、標本などの自然史関連物、蔵書などが含まれていた。なお、自然史のコレクションは1880年代にサイス・ケンジントンに、蔵書のコレクションは1997年に、それぞれ移転した。そして現在の大英博物館では、古代の石器から21世紀の版画まで、世界の文化の歴史にかかわる物品を収蔵している。その点数は800万点を超え、館内には70以上の展示ギャラリーがある<sup>10</sup>。

大英博物館が目的としていることは、世界の文化にかんする代表的なコレクションを収蔵し、それらについて、安全に保管・整理・調査・展示することである。



### 25 4-2. 現地の状況(1) : ベニンの銘板と聖なるイバラの聖遺物箱

- これまでのいくつかの項目で記述してきたとおり、文化財返還問題を考察するうえで、博物館の所蔵するベニン王国の工芸品への態度をみていくことは、同問題にたいするその博物館の姿勢の側面のひとつを見ることにつながる。そして、大英博物館は、ベニンの工芸品を多く有する博物館のひとつである。その一部は、「アフリカ」の展示室に展示されて



ベニンの銘板

<sup>10</sup> 大英博物館「大英博物館の紹介」『日本語ガイド 館内マップ付』、p.4



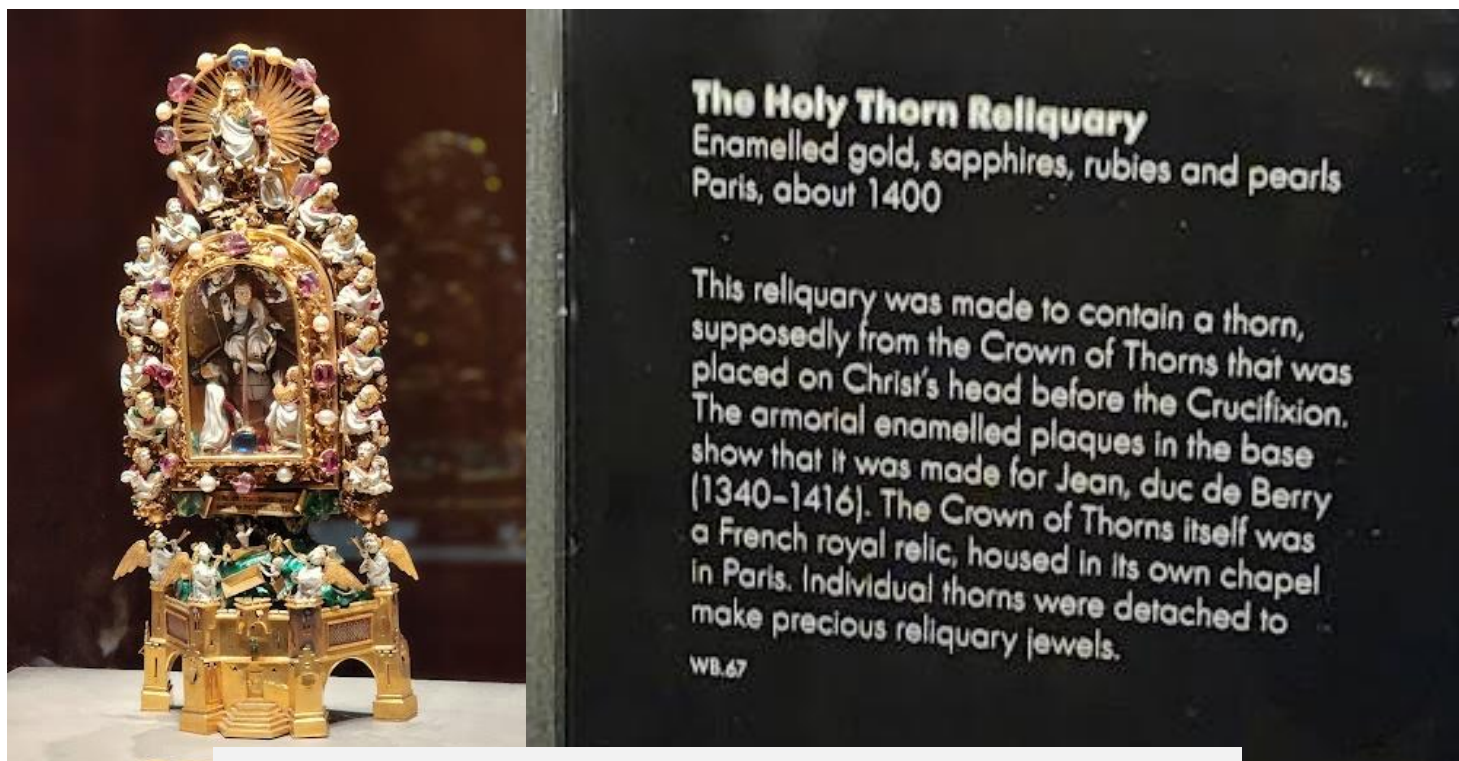
いる。同展示室のキャプションには、「いかにしてベニンの物品が大英博物館にやってきたか」と題し、「英国がベニン王国を植民地支配していたこと」「英国による暴力的な行為がなされていたこと」「(ベニンの物品が) 公的な戦利品として英国にもたらされたこと」が明記されていた。これらのキャプションは、英国の植民地支配の歴史を明示していると言える。

5 他方で、続く項目では、「国際的なベニン・コレクションと対話」と題し、その前半で「多くの博物館が、ベニンから略奪された物品を購入したこと」「英国、ドイツ、アメリカ、ナイジェリアなどの博物館のコレクションが重要」、後半で「ナイジェリアと共同で調査を行なっている」と記述されている。英国以外の国名を挙げることは、問題が英国のみに留まらないことを示すとともに、読み手の注意を「英国の責任」から逸らす役割も果たしているように捉えられる。



30 聖なるイバラの聖遺物箱 (The Holy Thorn Reliquary) は、参加したツアーのなかで紹介された展示物である。この聖遺物箱には、キリストのイバラの冠の聖遺物の1本のとげが納められている。1544年から1860年代まではウィーンで保管されていた。しかしその後、古美術商によって複製品が制作された。1925年、美術史家のジョセフ・DESTREYにより、大英博物館にあるものが本物で

あり、ウィーンにあるものが複製品であることが判明した<sup>11</sup>。ポランティアのツアーガイドは、「ウィーンにあるレプリカは大英博物館に、大英博物館にあるホンモノはウィーンにあるべきではないか」という旨のことを述べていた。



聖なるイバラの聖遺物箱 (The Holy Thorn Reliquary) とキャプション

20

#### 4-3. 現地の状況(2) : オーストラリアの盾

大英博物館の公式WEBサイトには、「コレクションのなかで論争の的となっている物品」のページがある<sup>12</sup>。そこに記載されている物品は、ベニンの工芸品、人間の遺骨、エチオピアの工芸品、モアイ像、エルギンマーブル、オーストラリアの盾、ナチスによる盗品、である。これらのうちのほとんどは展示室内においてすぐに見つけることができたが、オーストラリアの盾のみ、広大な「啓蒙」の部屋を端から見ていく必要があったために、発見までにやや時間を要した。盾には、「収集と帝国」と題したキャプションが付されている。これは、その展示物が、植民地時代にルーツを持つ展示物であることを意味する。しかしながら、「収集と帝国」のキャプションは、観覧者に論争の存在を伝達する役

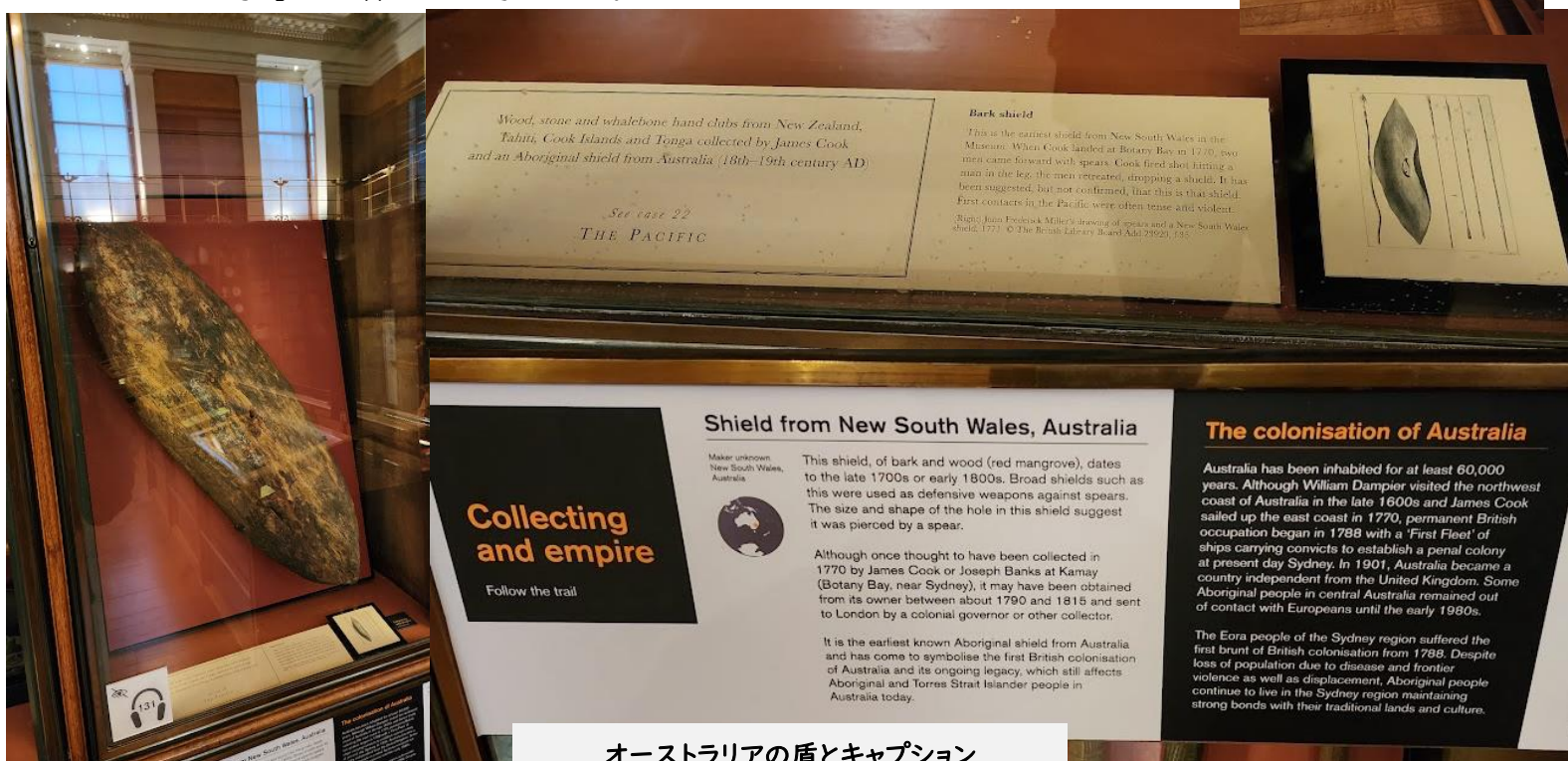
25

<sup>11</sup> John Cherry, *The Holy Thorn Reliquary*, THE BRITISH MUSEUM PRESS

<sup>12</sup> The British Museum, *Contested objects from the collection* (<https://www.britishmuseum.org/about-us/british-museum-story/contested-objects-collection>), accessed: 2023.10.19

割を有していないと考えられる。なぜなら、博物館内に「収集と帝国」とキャプションが付された展示物が21あるものの<sup>13</sup>、それには「コレクションのなかで論争的となっている物品」のページに掲載の無い物品も含まれているからである。

このオーストラリアの盾については、参加したツアーのなかで紹介された展示物である。ボランティアのツアーガイドは、その解説のなかで、「(この盾を大英博物館が所蔵しているのは)不公平だ、おかしい」「(小声で)私は返還こそが博物館の責任であると思う」という旨のことを述べていた。



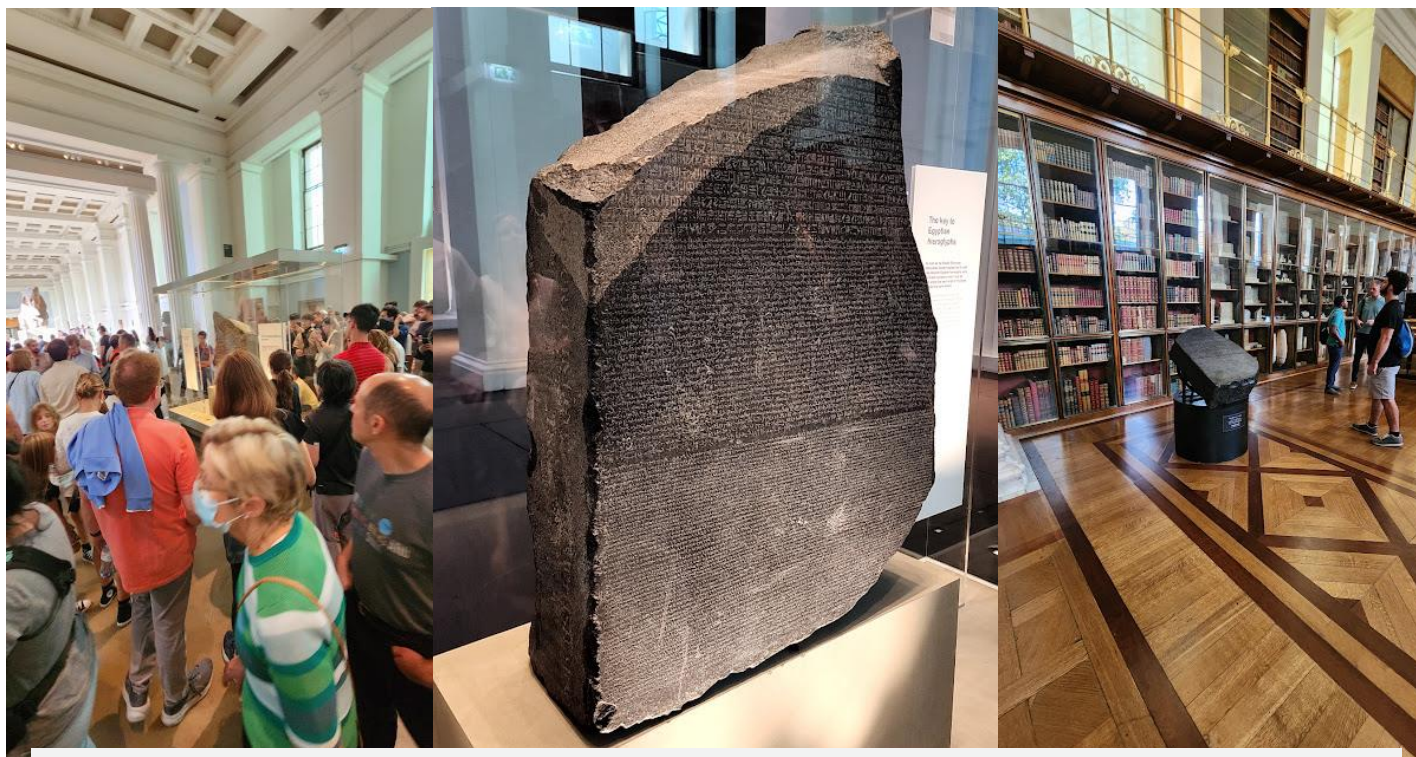
オーストラリアの盾とキャプション

25 4-4. 現地の状況(3) : 展示物の人気と問題の提示 — ロゼッタストーン、ミイラ、エチオピア

大英博物館に訪問する来館者のなかには、「古代エジプト」の展示室にあるロゼッタ石の観覧を目的とする人たちもいる。実際、四方が透明の板で囲まれているにもかかわらず、ロゼッタストーン  
30  
の展示ケースには、いつも多くの来館者が集まっていた。一方で、「啓蒙」の部屋には、もうひとつの「ロゼッタストーン」がある。こちらは透明の板で囲まれていない。また、素手での接触が許可

<sup>13</sup> The British Museum, *Collecting and empire trail* (<https://www.britishmuseum.org/visit/object-trails/collecting-and-empire-trail>), accessed: 2023.10.19

されており、来館者は刻まれた文字の凹凸に直接触れたり、表面を拳で殴ったり（ツアーガイドのひとりには実際に拳で殴っていた）、などすることができる。それにもかかわらず、こちらの「ロゼッタストーン」にはそれほど人気が無いようで、しばしば誰も人が集まっていないという状況すらあった。それはおそらく、こちらは現物ではなく、レプリカだからである。いくつかのツアーにおいては、立ち寄る場所のひとつとしてプログラムに組み込まれているようだが、現物と比べたときのレプリカの人気は圧倒的に低次なものであった。



ロゼッタストーン 左列：ホンモノ(裏側から) 中列：ホンモノ(表側から)、右列：レプリカ  
※いずれも同日に撮影

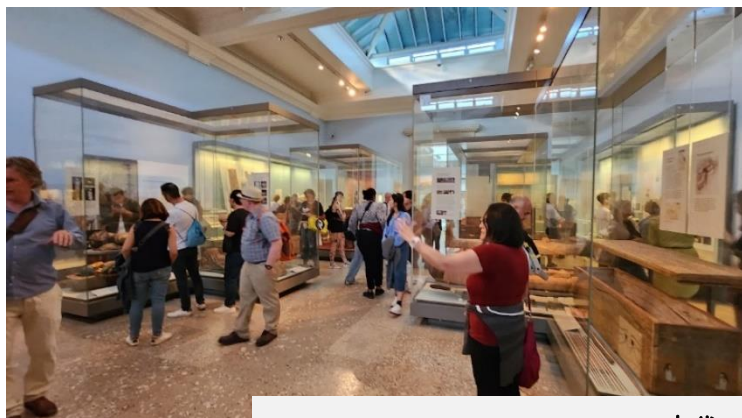
25 大英博物館で大きな人気を誇る展示には、ほかに、同じく「古代エジプト」の展示室にあるミイラや棺が挙げられる。平日にもかかわらず、展示室内は常に込み合っていた。ミイラは、前述したWEBサイト「コレクションのなかで論争の的となっている物品」の小項目「Human Remains<sup>14</sup>」のページにおいて言及されている<sup>15</sup>。同ページでは、Human Remainsが有する問題に言及されており、

<sup>14</sup> Human remains とは、人間の骨、皮膚、歯、髪などのことである。IIの2-2. ではピットリバーズ博物館の Human Remains に言及。

<sup>15</sup> The British Museum, *Human remains* (<https://www.britishmuseum.org/our-work/departments/human-remains>), accessed: 2023.10.19

Human Remainsにたいする大英博物館としての詳細な見解についての文書も作成・公開されている。この文書についてはまだ読み込めていないものの、少なくとも実際の展示室における解説パネル等のなかでは、大英博物館によるHuman Remainsにたいする見解を確認することはできなかった。

- 5      なお、博物館によるHuman Remainsについての調査結果およびその活用手法には、多様性がみられる。展示を取りやめたピットリバース博物館では、展示パネル上で、「訪問者がHuman Remainsをしばしば『野蛮』『原始的』の象徴と捉えている」ことは「人種差別や固定観念といった今日の博物館の価値観に反する考え方を強化する」ことが調査によって判明したと明示している。他方で、大英博物館のHuman RemainsのWEBサイトでは、「たいていの訪問者はHuman Remains
- 10      にたいして不快感を示さず、むしろ博物館展示として期待をしている」ことが調査によって判明したと明示している。



#### 古代エジプトの展示室

左列：ミイラとの2ショットを撮影する来館者、右列：混雑する展示室

- 人気という側面に注目すれば、ロゼッタストーンやミイラと比較したときに、相対的に人気の無い展示例のひとつとして、エチオピアの工芸品が挙げられる。この展示を立ち止まって観覧する来館者は、数える程度であった。その要因には、展示室がミイラの展示室に続く通路のような場所で、来館者の目に留まりにくいということもあるだろう。なお、エチオピアの工芸品は、上述したサイト「コレクションのなかで論争の的となっている物品」の小項目「Maqdala」で言及されている<sup>16</sup>。19世紀後半、エチオピアは英国に軍事的支援を要求したものの、英国はそれを無視した。激怒したエチオピアは、英人や宣教師などヨーロッパ人を人質にとった。これは英国国民の反エチオピア感情を刺激

<sup>16</sup> The British Museum, *Maqdala collection* (<https://www.britishmuseum.org/about-us/british-museum-story/contested-objects-collection/maqdala-collection>), accessed: 2023.10.19

し、英国政府はエチオピア侵攻を実行することになる。展示室の物品には、この侵攻で略奪された物品が含まれている。キャプションでは、各物品に描かれたモチーフの解説等がなされていた。しかし、WEBサイト上で確認できたような上述の歴史的な背景情報は、展示現場のキャプションや解説パネルなどには一切掲載されていなかった。

5

エチオピアの展示とキャプション



Room  
66

# Christian Egypt and Ethiopia

## Shared faith and local tradition



Over the last two thousand years, Egypt and Ethiopia have been home to Jewish, Christian and Muslim communities.

The objects in this gallery reflect Egypt and Ethiopia's place within a wider Christian historical context, and highlight exchange with other cultures and traditions.

The churches of Egypt and Ethiopia trace their lineage back to Saint Mark the Evangelist, author of one of the Gospels. Egypt and Ethiopia were closely connected through diplomatic and economic activity along Red Sea trade routes.

For further material representing Christian Egypt and Ethiopia, please visit Rooms 25 and 41; for Christian Nubia, please visit Room 65; for material relating to the Islamic history of this region, please visit Rooms 42-3.



## Ethiopia

The Kingdom of Aksum, in the Ethiopian highlands, was a great trading power in antiquity and one of the world's earliest Christian states. By around AD 350, the archbishop of Alexandria had appointed a Syrian called Frumentius as bishop of Aksum.

Christian texts were translated into the local Ge'ez language. This remains the liturgical language of the Ethiopian Orthodox Church. In religious practice and its associated art forms, distinctive Christian traditions evolved. Today Christian customs continue to flourish, such as pilgrimages to the historic rock-cut churches of Lalibela, or in the display of elaborate crosses during religious processions.

Christian traditions are part of a multi-faith culture and society in contemporary Ethiopia, building on centuries of exchange and coexistence with other faith communities.



The Church of St. George, Lalibela, Ethiopia, c. 1180 and 1200. A rock-cut church with the walls of the interior columns. The central tower is a copy of Lalibela's Christian symbols and pilgrimage. Photographed and used.

St. Patrick of Saint Mark (see transcript from The British Museum about 2010-2011). These walls are the latest evidence of growth. Illuminated with ethnographic symbols and the network for Christianity. (British Museum 2010, 2011, 2012, 2013, 2014)

#### 4-5. 総括：圧倒的な規模

大英博物館は、文化財返還問題を考察するとき、避けては通れない存在である。本調査活動では、有料・無料ツアーへの参加およびキャプションや解説パネルの観覧を実施したものの、そのなかで「文化財返還問題」に関連する要素の割合は、かなり小さなものであった。ツアーにおいては、ツアーガイドの担当者による情報提示に偏りがあると考えられ、なかには返還問題に言及するツアーもあった。展示においては、WEBサイトでは明言している関連情報であっても、実際の展示室ではそれがまったく提示されていないという状況もあったために、全体として返還問題への言及は非常に少なかった。しかしながら、ひとりの人間ではとてもすべてを把握できない展示物およびそのキャプションの数やボランティア・ツアーガイドの数を考慮すると、見逃している箇所が存在する可能性は十分に考えられるだろう。



### Ⅲ おわりに：調査活動を終えて

#### 1. 考察

##### 5 1-1. 文化財返還問題の展示状況 — 博物館にとっての文化財返還問題

本調査活動で訪れた博物館のなかで、文化財返還問題を展示する手法には多様性があった。ホーニマン博物館は、それを特別に強調するような工夫はなされていなかったが、同問題に明確に言及した解説パネルは設置されており、実際の返還の状況も提示されていた。ピットリバース博物館は、文化財返還問題をテーマとして言及する展示は無かったものの、展示の背後にある植民地主義的な性格については明示しており、その文脈のなかに文化財の返還の問題を組み込んでいた。ヴィクトリア&アルバート博物館は、文化財返還問題について言及した展示は無く、また、論争の的となっている工芸品に特別なキャプションが付されるというようなことはなかった。大英博物館は、「啓蒙」の部屋の一部やアフリカの展示室の展示パネルで、また、ツアーのなかで、植民地の征服や略奪文化財について言及する場面があった。

現地の状況から考えられることは、文化財返還問題は必ずしも、博物館展示で来館者に提示すべき最優先事項では無いということである。同問題について多かれ少なかれ言及している展示は、あくまでも、数ある社会的な課題や問題のなかのひとつとして文化財返還問題を捉え、展示していた。ホーニマン博物館ではアフリカの展示エリアにおける話題のひとつとして、また、ピットリバース博物館ではHuman Remainsの展示を撤去したことを解説するパネルのなかにおいて、文化財返還問題について言及していた。したがって、文化財返還問題にたいする現地の博物館の姿勢を調査していくさいに認識しておく必要があることは、同問題が、植民地主義など、相対的により大きな問題のなかに包摂される問題であり、展示においてもそれが反映される可能性があるということである。

25

##### 1-2. 伝統的な「博物館」と先駆的な「博物館」 — 何も知らないまま帰宅する訪問者の存在

伝統的な「博物館」とは、20世紀後半以前から登場している、権力や富を示す施設としての博物館のことを指す。その特徴は、来館者に驚異を提供することである。これにたいして、先駆的な「博物館」とは、20世紀後半以降に登場し始めた、非ヨーロッパ世界にも目を向ける博物館のことを指す。その特徴は、来館者に、驚異と併せて、思考の機会も提供することである。

本調査活動で訪れた博物館についてみると、ホーニマン博物館とピットリバース博物館は先駆的な「博物館」であり、V&Aと大英博物館は伝統的な「博物館」であると言えるだろう。ホーニマン博物館は、博物館全体として社会的な問題を提示する展示が多い。ピットリバース博物館は、来館者が初めに訪れる1階において、博物館全体の展示にかかわる展示の植民地性について言及している。V&Aは、絵画や彫刻や家具・装飾品などを数多く展示している一方で、論争の的となっている

35



展示物についてはその問題性を限りなく曖昧にしかねない展示を行なっている。大英博物館は、世界最大規模の展示数を誇り、WEBサイト上にて所蔵品が持つ問題性に言及している側面もあるものの、実際に展示の現場においてその問題性に言及している展示物の数はわずかなものに留まっており、その問題性がほとんど無視されているように見える展示物も多い。

- 5 前述のとおり、先駆的な「博物館」は、社会的な問題を扱うことで来館者に思考の機会を与える。他方で、伝統的な「博物館」は、こうした性格を持たない。したがって、伝統的な「博物館」の来館者は、展示物が持つ問題性を意識することなく館内を観覧し、展示物が持ちうる問題性を認識できないまま帰宅する可能性が高い。ふたつの種類の博物館の最大の差異は、この点にあると考えられる。

### 10 1-3. 博物館は要求された文化財を返還すべきか否か — ホンモノとレプリカ

- 本調査活動としてイギリスの博物館を訪問する以前の私は、「博物館は、返還を要求された文化財は、その要求に正当性が認められるのであれば返還を行なうべきではないか。仮に返還後、どうしても展示したいのであれば、レプリカで対応する必要があるだろう」と考えていた。この根拠には、  
15 日本の博物館で一般的にみられる光景があった。すなわち、日本の博物館の特別展の場合、モデルとなった現物に十分な価値があれば、仮に展示されているものが複製品であるとしても、来館者は高い関心をもってそのレプリカに接しているのである。

- しかし、本調査活動で訪問した大英博物館においては、そうでは無かった。ロゼッタストーンについて、現物の周りには常に大勢の来館者が集まっていたものの、レプリカの周りには必ずしもそうでは無かった。ここで私は、現物にはあってレプリカには無い、「来館者を引き寄せる力」の存在を目的に当たりにした。すなわち、仮に現物を本国に返還し、その現物の代替としてレプリカを展示したとしても、そのレプリカが来館者にとって現物と同等の役割を果たすことができる保証は必ずしも存在しないのである。博物館は、こうした「来館者による評価」と、「博物館としての立場・使命・歴史にたいする姿勢」と、「文化財の旧保有国が掲げる主張」を、それぞれよく検討したうえで対応することが求められていると言えるだろう。  
25

なお、状況はかなり異なるが、中央大学多摩キャンパスの中央図書館に展示されているロゼッタストーンは、学生からそれほど注目されていないように思える。やはり、レプリカのためか。



## 2. 反省

- 文化財返還問題を一般の人びとに知らしめる方法としては、ニュース等でのメディア報道のほか  
に、博物館による展示が挙げられるであろう。そのため、調査活動の前には、ニュース等でしばしば  
5 取り上げられる文化財返還問題が、現地の博物館の展示状況に反映されているのではないかと  
予測していた部分もあった。したがって、文化財返還問題が博物館展示にはそのまま大きく反映さ  
れていないという現状を確認できたことは、大きな成果である。現地の博物館の実際の展示におい  
て、同問題は、植民地の問題に内包されるという形で、あるいは、そもそも提示しないという形で、扱  
われていた。
- 10 本調査活動の全体にかかわる基礎的な反省点は、英語のリスニング・スピーキング不慣れであ  
る。特に困難を感じたことは、ツアーによる解説の理解である。多くのツアーに参加したものの、決し  
てガイドによる解説をいつも十二分に理解できていたわけではなかった。また、ツアーで言及された  
文化財返還の情報について、解説者からより多くの情報を効果的に引き出すこともできなかった。  
多様な英語のリスニング・スピーキングに慣れていないということが要因である。
- 15 文化財返還問題にかかわる調査活動は、主に、展示パネルやツアーガイドなどの、言語情報に  
依存しがちである。加えて、文化財返還問題にたいする博物館の姿勢を調査するためには、できる  
だけ多くの現場の状況について把握する必要がある。したがって、充実した調査活動結果獲得のた  
めには、英語をはじめとする諸外国語について十分に使い慣れていることが重要な要素となる。今  
後、英語をはじめとする諸外国語の学習にはいっそう力を入れていき、将来の現地訪問の機会には、  
20 より高い精度の成果を獲得できるようにしたい。



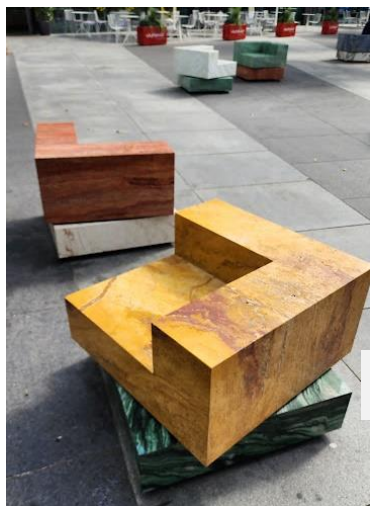
### 3. 余談と結び

ロンドンは博物館に限らず、芸術性に溢れた街であった。以下では写真とともに、ロンドンの芸術性を視覚的に紹介する。※計6点



①トットナムコートロード駅前のインスタレーション。滞在初日、ホテルの最寄り駅に到着し、初めてロンドンの町に足を踏み入れたときに遭遇

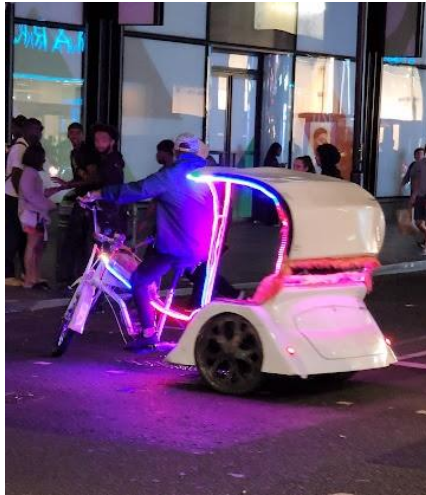
15



②椅子。特に右列のものは着席に躊躇する



③左列：路上ライブ。夕食時にもかかわらずかなりのオーディエンス  
右列：芸術的なホットチョコレート。チョコレート屋にて



④ロンドン版・人力車？



⑤左列：書籍のオブジェ。大英博物館の書籍販売所にて  
右列：天井ですら装飾。V&Aのミュージアムショップにて



⑥左列：手提げ販売。パディントン駅にて  
右列：フィナンシェとブルーベリーケーキ。V&Aにて  
ウィリアム・モリスのデザインがしばしばみられた。日本においても、セリアやユザワヤなどでみることができる

イギリスの博物館は、日本の博物館ではあまりみられない取り組みを行っていた。以下では写真とともに、印象に残った博物館の取り組みを視覚的に紹介する。※計5点

①寄付の奨励。訪問したいずれの博物館においても例外なく、いたるところで寄付の協力を呼び掛ける装置があった。デザイン性に優れたものからデジタルなものまで、多様な形態をみられた



ホーニマン博物館  
電子決済



ピットリバース博物館(オックスフォード) 現金

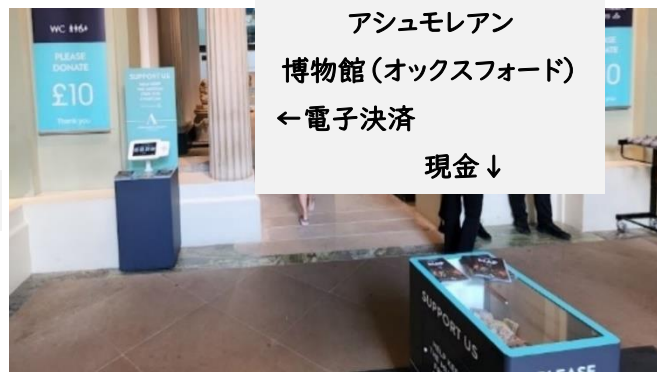


自然史博物館(オックスフォード)  
現金



自然史博物館(ロンドン)

↑ 現金



アシュモレアン  
博物館(オックスフォード)  
← 電子決済  
現金 ↓



現金



現金 ↑  
電子決済 →



大英博物館

②大英博物館における一部展示の閉鎖。本調査活動期間にちょうど、エルギンマーブルの展示室が調整により閉鎖されており、観覧不可であった(左列)。また、日単位で、アフリカの展示室や日本の展示室など個別の展示室が閉鎖されることもあった(中・右列)。日本の博物館ではみられない事例であるように思われる。



③アヒルちゃんとのコラボグッズ。博物館内はもちろん、ロンドン市内の雑貨屋等でも販売されていた。大英博物館にて



④「なぜカラなの？」と書かれた展示ケース。来観者に「これは何だろう」と思わせるような工夫と言える。なお、展示物に適した湿度を確認しているとのことであった。ホーニマン博物館にて

⑤アクセシビリティ。すべての来館者にとって博物館での滞在が少しでも過ごしやすくなるような空間づくりが実現されていた



館内マップが立体な構造。また、点字の記載  
ホーニマン博物館にて

5

10

15



視覚に障害を持つ来館者でも楽しめる  
自然史博物館(オックスフォード)にて



拡大鏡  
アシュモレアン博物館(オックスフォード)にて

\*\* 結び \*\*

30

本調査活動を実現するにあたり、資金面で多大に支えていただいた中央大学文学部に感謝を申し上げる。ウクライナ戦争や円安によって燃料費等が高騰するなか、学外活動応援奨学金は非常に大きな助力となった。そして、テーマを発見するきっかけをつくってくださった横山先生、奨学金の申請から現地への渡航まであらゆる面で支援してくださった石橋先生、実務的な側面からの確

35

に助言してくださった酒井先生といった文学部の先生方をはじめ、お世話になったすべての方に、厚く御礼を申し上げる。